



昭和50年(1975年)
4月号(No. 358)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100円

目次

本文・行事

- ナンダ・デヴィ遠征計画
ナンダ・デヴィ計画グループ…(1)
名誉会員 中原繁之助氏を偲んで
……………津田 周二…(2)
雪崩シンボジウム雑感
……………神崎 忠男…(2)
第13回<この一本展>③……………(2)
不遇な山々(一)……………石間 信夫…(5)
一等三角点について
……………水野 公男…(7)

紀行・文芸

- 微笑の思い出……………田辺 主計…(4)
未文ヶ岳……………川崎 精雄…(5)
五郎岳……………川崎 精雄…(6)
草木抒情……………伊藤秀五郎…(6)

海外からの便り

- エベレスト日本女子登山隊
……………久野 英子…(9)
プエノスアイレスより
……………南米大陸女子縦断隊…(9)

図書紹介

- (新版) アルプス記
……………望月 達夫…(9)

その他

- カット……………松本慎太郎…(3)
上高地山岳研究所第二次一口募金
……………(6)

ナンダ・デヴィ遠征計画

ナンダ・デヴィ計画グループ

① ナンダ・デヴィ主峰(七、八一六m)登頂と、主峰より東峰(七、四三四m)への縦走
② ガルワル地域における各種學術調査
③ 日本山岳会、インド山岳財団の合同登山とおしでの親善

① については、今さら述べることもないが、縦走という試みとおしで、ヒマラヤ登山の新しい方向の一つをさぐり、可能性をひろげてゆきたい。けして容易な課題ではないが、私たちの自信はもっている。②については、ガルワルは最近私たちにあっては、比較的入域しにくい地域であり、今後も見通しが必ずしも立たない状態であるので、事情が許せばこの機会に若干の専門研究者を加えたいと考えている。③については、会自体を代表する隊がこのような形で本格的な合同登山を行うのははじめての試みでもあり、今後の試金石ともなるので、その意味でもぜひとも成功させたい。

一、隊の名称
日印ナンダ・デヴィ登山隊一九七六
Indo-Japanese Nanda Devi Expedition 1976

三、隊の構成

日本山岳会、インド山岳財団、合同の形式をとる。登山活動に関する隊の主導権は、日本山岳会側にある。隊員の構成は、つぎのように考えている。
隊長 一名(日本側より)
隊員 十二名(日本側より八名、インド側より四名)
医師 一名(日本側より)
準隊員 六名(インド側より)
すなわち、インド山岳財団からは四名を隊に参加させる。日本側の隊員数はとくに制限されておらず、隊長、医師を含め十名という数は、私たちが登山計画を検討した結果、算出したものである。この場合、隊長、医師は同時に登攀要員である。
準隊員はシェルパであるが、ダージリン等の登山学校のインストラクター級を想定している。他に若干のキッチンスタッフを雇用することになる。
なお、学術隊員は別枠とする。
日本側の隊員は、この計画の特殊性(縦走であること、その基盤としての本隊、サポート隊人数で建設、維持せねばならぬこと、合同隊であること等々)から、ヒマラヤ経験者、それも高所での実績のある者を中心に編成したいと考えている。

四、日程

大略、つぎのようなものとなる。
七五年八月 隊の代表者渡印し、インド側と合同の条件の細部について打合せ。帰国後、隊員決定。
七六年三月中旬 先発隊出発。
四月上旬 隊荷発送。
中旬 本隊出発。ニューデリーでインド側隊員と合流。
下旬 ニューデリー発。ジョシマートよりキャラバン開始。
五月中旬 リシ・ガングを経て、ナンダ・デヴィ内院にベースキャンプを建設。以降、六月下旬まで、約五十日間登山活動。

五、登攀計画

登山期間はガルワルでは比較的天候の安定する五月十日から六月三十日の約五十日間とする。また、リシ・ガング経由のキャラバンも、これより早いと困難がより大きいようである。ベースは標高四、九〇〇mにおき、ここから隊を二分して主峰南麓、東方南麓にそれぞれ前進キャンプを建設する。縦走隊は主峰南麓の最終キャンプ

(西第五キャンプ、約七、七五〇m)から出発し、主峰をこえて東峰へむかう。サポート隊は東峰近くに設けられる収容キャンプ(東第四キャンプ、約七、四〇〇m)で待機し、縦走隊を収容する。なお、主峰、東峰間の距離は約3km、最低コルは約七、二〇〇mである。縦走隊の安全を確保し、成功の確率を高めるため、酸素は積極的使用する。
六、予算
総額 一、七八〇万円
内訳

渡航費	二五〇万円
輸送費	一〇〇万円
装備費	六八〇万円
食糧費	七〇万円
酸素費	七〇万円
医薬品費	一〇万円
写真材料費	二〇万円
梱包費	五〇万円
事務費	七〇万円
(国内費小計)	一、三〇〇万円
滞在費	八〇万円
現地輸送費	一七〇万円
現地食糧費	六五万円
現地装備費	四〇万円
人件費(シェルパ等)	四〇万円
現地事務・渉外費	三〇万円
予備費	五五万円
(外貨費小計)	四八〇万円

なお、この予算は隊の必要経費の総額で、現地費用の若干はインド側により負担される予定である。
以上、計画の概要を記しましたが、この計画は、いまでもなく会のみならず、さまたげなご支援をいただかなければ、とうてい実行に移せるものではないと。今後、さまざまな形でご助力をお願いすることになると思っております。
(鹿野勝彦)

名誉会員

中原繁之助氏を偲んで

津 田 周 二

中原さんを知っている人は、関西の古い岳人を除いてあまりないかも知れない。私たちの山登りの一時代先輩であり、私たちの初期から中期にまでぐらいい一緒に山登りをした人で、あまり派手な行動はなかったが、永い経歴と山への情熱の持ち主だった。

日本山岳会へ入会されたのは、加賀正太郎さんの紹介で明治四十四年と記録されていますから、数え年で二十歳、恐らく三高在学中だったと思われる。

中原家は大阪の旧家、鴻池家の分家であって、古く大阪町人十人衆の一人とされている。大阪朝日ビルおよびその東側の敷地は、中原家の旧所在地で、代々この堂島川に面して住んでおられたのでした。私たちが山を通じて親しくなった頃には、香榎園の南端、夙川の川尻の海岸添いに、およそ二千坪の敷地をもった広大な屋敷に住み、その構えの大きさに驚いたのです。この中原家のさらに分家として榎谷家がありました。当時の主は、古い岳人なれば誰でも知っている、榎谷徹蔵さんです。榎谷さんは、甲陽中学の先生で、山岳家として、また山の漫談家として有名な方です。山のバステル画ではきわ立った、ユニークな人です。私たちの若い頃には榎谷さんの山の話の聞くのが楽しみの一つでした。話は非常に上手で「山岳講談」と悪口をいう人もあったのですが、山の知識の豊富な人でした。中原さんの山登りは、この榎谷さんの影響を受けられたものと想像できます。

中原さんが京都大学工学部卒業間もなく、榎谷さんと共にされた北海道の山歩きは、榎谷さんからよく聞かれました。未開発の北海道の山々を馬で踏査され、ことに阿寒岳へ登ったときは、永い馬の道中で尻に豆を作った話など、未だに記憶に残っています。大正十四年から約一年間、ヨーロッパへ留学、その間スイスの山歩きをされています。榎谷さんのアイガー登攀から二、三年後の頃だったのでしょうか。多くの写真や地図をみせてもらいました。ゴルナーグラトのパノラマ写真は後日複写して岳友に頒布されたものでした。

昭和七年に山岳図書出版を目的とした、「黒貝合社」を創設、実弟中江喬三さんと共に利益を計算しない事業をはじめたのでした。水野祥太郎君の「山野スキー術教本」三木高孝氏の「山岳征服」藤木九三さんの「屋上登攀者」その他、伊藤憲君の「ヒマラヤに挑戦して」等、われわれ仲間の数多くの山岳図書を世にだされたのでした。昭和十年、日本山岳会関西支部が正式に決り、かつ支部ルームが設置されることになってからは、一日に一度は必ず支部ルームに立ち寄り、事務を担当してもらっていました。地味な面倒な仕事を気持ちよく引受け、いやな顔ひとつみたくことはありませんでした。

中原さんが五十六歳のとき「脊髄ゼンカク炎」、いわゆる小児マヒに罹られました。水野君曰く「子供のときに罹るはずの病気を五十六歳になってかかったのだから、いかに深窓に育ったかが分る」、もちろん冗談まじりであったが、年がいてからには、この病気が非常に珍らしく、よく頑張り通して、その回復状態を水野君に話し、子供では、今日まで分らなかった病状の推移を知り得て、大変な参考になったと、後日水野君の話でした。

昭和七年に山岳図書出版を目的とした、「黒貝合社」を創設、実弟中江喬三さんと共に利益を計算しない事業をはじめたのでした。水野祥太郎君の「山野スキー術教本」三木高孝氏の「山岳征服」藤木九三さんの「屋上登攀者」その他、伊藤憲君の「ヒマラヤに挑戦して」等、われわれ仲間の数多くの山岳図書を世にだされたのでした。昭和十年、日本山岳会関西支部が正式に決り、かつ支部ルームが設置されることになってからは、一日に一度は必ず支部ルームに立ち寄り、事務を担当してもらっていました。地味な面倒な仕事を気持ちよく引受け、いやな顔ひとつみたくことはありませんでした。

雪崩

シンボジウム雑感

神崎忠男

それから数日後の十二月十五日の未明に逝去されたのです。名誉会員章を生前にお渡しでき得て、心からよかったと思われました。病名は胃ガンと肝臓の悪化とのことです。明治二十五年六月十一日生れですから、満八十二歳と六ヶ月ということになります。(五〇、二、一八)

私たちの学生の頃(昭和三十七年)から雪崩シンボジウムの名前を聞いていた。その内容的なものはさほど変っていないが聞きになる人の方が変わったように思われる。当時は富士山をはじめ各地で雪崩による大学山岳部の遭難の記憶も生々しく学生においてはまだかなり積極的な関心が雪崩の知識習得にみられた。今年のシンボジウムあたりは一般の方、古い会員の方が目立ち、担当者側も今までのマンネリズムに合わせて聴取者に合う内容を考えて時期をむかえたのではないかな。

先日の放談会において、山岳会の活動の中に大学山岳部(学生)を中心としたものが多いというような苦言もあったとおり、とくに雪崩シンボジウムなどはその企画性の強いことは事実であります。ただ価値観の大きさは学生にあるので大学山岳部中心の強い色があるのではないか……とくく社

会人山岳部とか大学山岳部とか批判論的意見はナンセンスな問題でありここで私が云々できることではないが、社会人だの学生だのと自然は区別してむかえてはくれない……まあ、社会人も学生もすべて会員であることは間違いない。その中でさきほど述べたとおり、雪崩シンボジウムが学生にその価値が大きいことを認めながらも肝心な学生が集まらない事実をみると、内容の充実性を反省させられるわけですが、学生に関しては内容面ばかりが出席いかんのすべてではないように思われる。内容のことをいわしていただければ担当者側のいい訳がましい答弁になるかも知れないが山岳会としては雪崩シンボジウムに関しての集会はこれの程度のことしかできないのが現状ではないか……企画面にも欠陥があり、内容のマンネリズムからみて魅力にとほしい会かも知れない。しかしそれほどこの会の内容的なものに期待されれば依存することにも疑問を感じる。よく日本山岳会の雪崩シンボジウムに出席したから雪崩の知識者になったような錯覚する人がいるが……ここで説明するまでもなくナンセンスなことである。日本山岳会の弊害の一つをここにみるものであります。

りもそれに接し利用する側にその要
(かなめ)があるのではないだろうか。
現実、理論的に会の在り方がどうで
あろうと価値論がどうであろうとて
きていねむりしている学生をみるに、
あなたをねむらせるために会を開いた
のではありませんかと感情論もとびだす
昨今の雪崩シンポジウムです。学生
さんに責任を押しつけるつもりは毛頭
ないが、それなりの利用法を自覚して
いただければ結構価値が生ずること
を知ってもらうと同時に、雪崩シンポ
ジウムに関しては他人ごとでない気も
するので、学生の自発的な企画で開く
ことがもっとも内容があり、真剣味が
でるのではないかと……文がいねむり学
生に固執してしまいました。雪崩シン
ポジウムに限らず、集会の在り方
というものを山岳会の運営問題の一環
として、会員の一人一人の自覚に基づ

き会員相互理解を計ることが、営利を
目的としない趣味同人の組織の運営で
はすべてが優先するのではないだろう
か。
最後に今回の雪崩シンポジウムの
各講師の方々にお礼申し上げます。



(松本慎太郎画)

第十三回(一)の一本展③

山のスクラップ・ブック一冊

望月 達夫

中学生の頃からはじめた山の新聞記
事のスクラップ・ブックは、二十余冊
になってしまったが、そのほとんどが
ヒマラヤや海外の登山の記事が大部分
である。もっともこの数年は大部分さ
ばって主要なものに限っている。

「この一本展」に差出すほどの稀書珍
籍をもっていない私は、やむなく私の
スクラップ・ブックの一番古いものを
お目にかけることにした。といつても
一九三〇年一月以降のものだから、私
の中学四年の時のものだ。ディーレン
フルトのカンチンジュンガ達征の記
事(朝日)が多く、その他に一九三三

年(昭和八)一月朝日に載った旧松高
山岳部による冬の穂高屏風岩初登攀の
切抜きなどは、他に発表されたものが
ほとんどないだけに、今となつては珍
らしいものに属するだろう。(中村讓
次氏記。また一九三三年八月読売所
載の松方さんの岩登の記事なども同氏
亡き現在、思い出のよすがとならない
ものでもある)。

走査式

日本植物検索便覧(顕花植物篇)

稲田豊八編著 昭和三十七年発
行 手刷五八頁 限定五〇部
伊倉 剛三

数限りないまでに多くの植物を、一
つ一つ図鑑と照し合せて、その名や形
を知ることは困難なこと、従来の検
索表によつてその科名を知るにも門外
漢のわれわれにとっては大へん至難な
ことである。これを走査式と称する新
しい方式によつて見事に解決したので
本書である。

著者の稲田豊八氏は(会員番号二三
八〇番 昭和四十四年二月七日逝去)
登山、スキー、植物、野鳥の研究など
広範囲にわたり後世に残る立派な業績
を残された方で、この書も永い間のた
ゆまなし研究の成果によるものといえ
よう。

本書は、すべて同氏が一枚、一枚丹
念に原紙を切り、手刷りによつたもの
であるが、そのすみずみまでいかに氏
が植物に深い愛情を注がれておられた
かがうかがえる。なお製本は小生の手
によつたものである。

キャプテン・ノエルの本 とその訳書

織内 信彦

とくに珍らしいという本ではないと
思うが、ぼくが学生のころ、昭和の初
期といつてよいだろうか、にでたヒマ
ラヤのことを書いた本の訳書の一つに
J・B・L・ノエル原著、大木篤夫訳
「西藏を越えて聖峰へ」(博文館)とい
うのがあった。

ヒマラヤに関するまとまった訳書で
は、本会委員の田辺主計さんが昭和五
年に第一書房からヤングハズバンドの
訳名「エベレスト登攀記」をだしてい
るのがいちばんはじめではないか、と
いう説がある。これは先だって望月達
夫氏や横山厚夫氏と奥秩父の山をある
きながら雑談をしゃべったときにでた話
である。

田辺さんの訳書が昭和五年、そして
大木篤夫氏のノエルの本の訳書が一年
あとの昭和六年である。相ついでヒマ
ラヤそれもエベレストの本がでてい
るのも今考えてみて面白いくらいと思
う。田辺さんの訳はすでに定評のある
ところだが、大木篤夫氏の訳も非常に
流麗で、当時読んだばかりなどは、いや
が上にも若い血を沸かせられたもので
あった。この訳者がどういふ人か不勉強

強でわからないが、よく似た名前の詩
人がいたので、あるいはその人なのか
どうか、もし知っている方がいたらご
教示願えれば幸いである。
ノエルはマロリイやアーヴィンにと
もに一九二一年と二四年の遠征に参加
しもっぱら映画撮影を担当している
が、彼の眼を通して描かれたチベット
や、ヒマラヤや、エベレストの叙述は
まことに美事で、今日のヒマラヤ本に
ない面白さにあふれている。

ぼくは偶然の機会にこの原著を手
に入れた。原名は Captain J.B.L. Noel
"Through Tibet to Everest"
発行所はロンドンのエドワード・アー
ノルド社であつて、田辺訳のヤングハ
ズバンドの本も同じアーノルド社、原
著の発行はヤングハズバンドの本が一
九二六年(大正十五年)、その後も数回
版を重ねている。ノエルの本は一年あ
との(昭和二年)、日本における訳書の
出版と同じくちょうど一年違いであ
る。この本には

To my Father
From Whom I Inherited
a Love of Travel

というデケイションがついている。

日本名山図会

深田志げ子

谷文晁は辞書に「煙霞の癖あり、足
跡は奥州から肥前にわたり、日本名山
図会はその所産」と記されている。天
地人の三冊よりなるこの本は文化初年
の出版である。これを亡夫が何時頃入
手したのか私にはつきり知らない。九
山山房の蔵書ではなく、八畳の書齋の
床の間に山積されていた本の中にあつ
た。夫が眺めている時に傍からのぞい
たら「この山は知っているだろう。お
前の登った山だよ」といわれた。たし
か恵那山だった。ついでにあちこち頁
を繰ったが、今と形の違う山もあった。

「街道から見える山も多いが、ともか
くよく描いたものだ」と夫は倦みか
入っていた。この名著が日本百名山を
書くヒントになったのではないだろう
か。元気でいるうちに訊いておけばよ
かった。一昨年の九山忌に郷里に行つ
た留守中、雨漏で汚してしまったのを、
著者に亡夫にもお済まぬ思いでい
る。

米国アルプス踏破記

木下 糾著

世界堂発行 昭和六年七月十五日
四六版天金二二三頁 原色水彩画
地図、写真九十餘図挿入。

一九三二年ロサンゼルス市にて
著者木下先生より元北大総長佐藤
昌介先生への贈呈本(署名入)

龜田与三

本書の内容は米国の代表的高峰を著
者自ら踏破した体験記であり、すなわ
ち最高峰ホイットニーに日本人として
最初の足跡を印した貴重な記録を初め
として、氷河の雲峰レニアの絶頂を極
めた記録、大陸の大背梁、ロッキー山
脈の神秘境を征服した紀行などを収
め、雄渾壮快な文章で書かれてありま
すから興味は津々として尽きません。
なお左記先生の本書に対する推賞文
を付記します。

小島島水氏曰く 本書は米国の最高
峰ホイットニーに日本人としての第一
登山を為した記録、及其他の紀行を収
めている。米国の同胞より斯る登山家
が出たことは悦びべく、頓て山岳文学
中の獲難き珍本となるであらう。
田村剛博士曰く 米国に移住せる一
同胞が克明に北米の山岳を踏破して物
した奇しく美しい情熱のレコードであ
る。読む者はさながらに米国アルプス
を行くような詩境に誘われ、そして著
者と共に自然界に全く国境のないこと
を感懐しないではない。

冠松次郎氏曰く。私は此本を見て第一に感じたことは在米の同胞の中に著者の如き山岳熱愛家を発見したことの大なる喜びである。亜米利加の山を知らない私でさえ、読んでみると自ら氷河をたどり嶺風に浴しているような強い感じをそえられる。

ワンダリングス・アモンゲ

・ザ・ハイアルプス
アルフレッド・ウィルス著
一八五八年刊(第二版)
渡辺 公平

今は、もうその場所にはないと思うが、本郷から香坂坂にさがる途中にあった南陽堂で、偶然に発見したのが、この本である。本郷あたりまで探書ハイキングを楽しんでいたところだから、

微笑の思い出

人は一つの微笑によっても慰められ、また励まされるといわれていますが、私もいろいろの人や今は亡き人の中に、その「ほほえみ」がまず先に心に浮かぶ人があります。そして、知らない人のこれということもない「ほほえみ」さえも思い出に残るのです。詩や物語の中でも微笑の場面がよく思い出されます。ヴェルコールの「海の沈黙」(Vercors: Le Silence de la Mer-Recit)の最後の場面ですが、第二次大戦の時、ドイツ軍に占領されたフランスの地方にあった、この物語の語り手になっている人が若い姪と二人で暮らす家の「一室を占めていたドイツ軍将校のフォン・エブレナクが、ナチスのフランス懐柔政策の裏切りと、戦争というものに絶望の心を抱いて、遠く東方にあるロシアの広大な原野の戦場へ移って行く前夜のことなの

多分昭和七、八年ごろであったと思う。医学書の中にまじって、きれいな紫色の背中に金文字で、ハイアルプスというのが目についた。なにげない顔をして、「いくらだ」とたずねると「金十円」。当時のサラリーの九分の一の金額になるが、それにはかえられないと考へ、思いきって手にいれたものである。ウィルスはヴェッターホルンの初登頂者で、ACCの創立者の一人でもあった。そしてワインバーがマッターホルンで事故を起こした時には、ACCの会長であった。彼のガイドであり親友でもあったオーギュスト・バルマー、この本がさざげられているのもひじょうな魅力だと思った。(以下次号)

田辺主計

です。フォン・エブレナクは、この答えのない沈黙の二人にも温い心で、毎夜のように自分の考えや、いろいろの話を独言のように語るのです。そして「お休みなさい」(ボン・ヌイ)だけではなく、「Je vous souhaite une bonne nuit.」という声は、その日その日の終るところで詩や音楽のリフレインのように聞えるのです。その夜はさらに「アディエ」と別れの挨拶をして、穏やかに姪の顔をみました。そしてフランスの多くの民衆とともに沈黙の抵抗をつづけていた、この姪の淋しく閉ざされていた唇が初めて微かにほころび「ご機嫌よう」と答える声が確かに聞えたようでした。それで、フォン・エブレナクは微笑を浮かべて自分の部屋へ戻って行くのですが、この微笑によって、この人の最後のイメージは「ほほえみ」のイメージになった、と

語り手が述べています。

また、サン・テグジュペリの「或る人質への手紙」には言葉も通じない敵の中に囚まれて危険が身にせまってきた時に、一つの微笑によって救われるところがあります。そして、「ほほえみ」のもつ力について、「ほほえみの質が人に人を捨てさせることもできる」(Et la qualité d'un sourire peut faire que l'on meure)とあるのも誇張した言葉とは思われません。

微笑は口辺にだけではない目にも現われます。そして、悲しみを覆う「悲しく美しい」微笑の思い出は私にもいくつもあります。そのような時、ヴェルレエヌの詩「艶なるうたげ」にある「月の光」の中の「Au calme clair de lune frise et beau」(悲しくも美しき月魂の光のみて——鈴木信太郎訳文より)の一行が、ガブリエル・フォーレの美しい歌調とともに心に浮ぶのです。いろいろの国の民謡にも楽しいことよりも悲しみや心の悩みを唱うのが多くあります。ウイリアム・フイシャの書いた「アブラランド民謡集」への解説中に、この虐げられた民族について「楽しんで見せる時にも、そのほほえみの陰には、いつも涙がひそんでいる」とありました。人は、早く忘れようとするよりも、なにか美しいものに慰められ静かにその悲しみの中に浸っていたらと思う悲しみをものがあふるのだと思います。

「スマイリング」という言葉は、人の表情にだけでなく自然や風景の形容にも使われ、天地は喜色に満ちていたという引例も英和辞典に載っています。サマセット・モームのスペイン旅行記「The Land of the Blessed Virgin」(聖女の国)の中には「トラガの町は、the most smiling town」であって、その女たちの目は美しく唇に

は、いつも微かなほほえみが浮かび、声を穏かに美しい」とありました。

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の日本印象記の「日本人の微笑」の中で「日本の事を良く知らない外人には、この微笑の質が判らず好感を抱かぬ人もある」と書いています。これは明治時代のことですが、数年前に、やはり外国の人が、日本人はなにかという声を立てて笑うが、その目は笑ってはいない、といったと私は聞きました。私も同感です。ことに現在は、荒々しい笑いや、お世辞、ごまかし笑いなどが多く、そのような笑顔を、まるで伴奏にしてしゃべっている人をよくみかけます。また、その使っている言葉も乱雑になってきているのです。騒音、有毒空気に悩まされ、日々の不快事とともに人にも自然も荒廃に傾くこの国のどこに「スマイリング・タウン」はあるのでしょうか。

一九五三年のエヴェレスト登頂記録「ジ・アセント・オブ・エヴェレスト」の中の「このエヴェレストの物語は友情とチーム・ワークとの物語である」というハントの言葉を私は忘れられません。われわれの日々の生活社会においても、為政者、民衆相互の間に正しくこの配慮、厚意とチーム・ワークが極めて大切なことを強く感じるので

「海の沈黙」について

ナチスに対するフランスでの抵抗秘密出版の一つとして戦中(一九四二年)に出版された、この「海の沈黙」は抵抗文学の代表作として人々に読まれ、日本では、河野与一氏の訳が加藤周一氏の訳の「星への歩み」と合せて一九五一年に岩波の現代叢書中に出版され、同年に加藤周一氏の「抵抗の文学」も岩波新書で再版された。これらの抵抗文学には、悪に對する抵抗とともに人間の在り方と生き方、愛情の美しさが

『山』に原稿を
お寄せ下さい!!

現われるのです。

十何年も前になりますが、加藤周一氏がフランス語を十数人の若い人たちに教える集りに、私も幸い出席を許されたことがありました。その教材としてサン・テグジュペリの「星の王子」と「或る人質への手紙」そして「海の沈黙」が選ばれました。加藤先生は講義の時に、原書を独り語るように静かに朗読されることがよくありましたが、ことに台詞のところへくると、加藤先生ではなく、フォン・エブレナクが微笑を浮かべて語っているような心地に私はなりました。

「微笑」の場面としてとくに「海の沈黙」をあげたのも、私にとってこのような思い出があるからなのです。

松方さんを偲んで

昨年の年次晩餐会での第十二回「この一本展」の目録中の「松方三郎著作展」のところにある藤島敏男さんの文の終りに「九月十三日の夕ぐれ、松方君の枕頭で、ザミからこんな本が届いて、中に君の名も出ているよと告げた私の言葉に、かすかな満足気な表情が口辺に浮んだのを私は見逃さなかつた。」とあるのを読んで、私は心を打たれました。亡くなる一日半位前、目も閉じたまふ藤島さんのお話に答える、このような穏やかな表情、かすかなほほえみの現れは、藤島さんにとっては淋しい中にも忘れられない和やかな最後のイメージになることと私は思うのです。

昨年十一月の『山』記載の松本重治氏の「松方三郎君を偲む」言葉の中にも「三郎君の笑顔」が現れます。また、松方さんが「二年に余る闘病のあ

いかに「苦しい」とか「痛い」とかいったことは、一言も吐かなかった」とありました。

私も松方さんを想うと、いつも濁らない清い目と和やかな容顔が、すく心に浮かぶのです。松方さんのお宅で山仲間が集り今はなつかしい思い出になりました。松方さんの、皆との談笑を楽しみ、なんでもないことや子供のような話にも、すぐ気持よく答える軽い言葉からも、私はいろいろ教えられることがあったのです。松方さんは不正、不潔を許さない厳しい心とともに、美しい正しいこと、人々の善意の尊重、友情の喜びの温い心が自ら顔に

登山人口が増え、山が大衆化するにつれて、交通機関は山奥へ延び、山小屋は到る所に建って、登山シーズンにはどこへ行っても大変な賑わいである。

バスやケーブルには長い行列ができ、山小屋は満員で足をのびして寝ることもできないのはまだしもとして、槍の穂先へ登るにも、名だたる岩場へとりつくにも、順番を待たなければならぬというに至っては、まったくもって論外である。

未だ登ったことのない山へどうしても行きたい時は、こうした混雑もがまんしなければならぬが、乗物と山小屋の混雑を思うと、意欲もとかく鈍りがちである。

不二大先輩の遊樂登山ではないが、私の最近の山歩きも、案内書にない、登路も分らない、未知の山へと多く向けられている。

地方へ行けばまだまだ知られていない山も少なくないが、標高二、〇〇mを基準に求めれば、日本アルプス主脈の末端か、傍へ派生した支稜の山々ということになる。

さしずめ私達の地方でいってみれば

現われるようでした。

ここでまた、ハントの「エヴェレスト登頂」の中の「反省」の章にある、この一九五三年登山の時に、「起居をともした四カ月の間、随分困難な環境のうちにおかれることが多かったけれども、隊員相互の間で短気を起したり荒々しい言葉をだしたのを、私は一度も耳にできなかった。これは特記に値する事実だと思ふ」という言葉を思い出します。そして、松方さんからも受けた、このようなイメージも山岳会の伝統精神と結びつくものがあるように私は思うのです。

(一九七四年十一月)

登山人口が増え、山が大衆化するにつれて、交通機関は山奥へ延び、山小屋は到る所に建って、登山シーズンにはどこへ行っても大変な賑わいである。

バスやケーブルには長い行列ができ、山小屋は満員で足をのびして寝ることもできないのはまだしもとして、槍の穂先へ登るにも、名だたる岩場へとりつくにも、順番を待たなければならぬというに至っては、まったくもって論外である。

不遇な山々……

以下私が最近歩いた、案内書にほとんどでていない静かな山を、五つ六つ紹介してみることとする。

一、御池山(一、九〇五m)

南アルプスの大沢岳から天竜谷へ派生した大尾根は、小沢川と遠山川の支流北俣沢の間を西へ走り、奥茶臼山の二、四七四mで南と北へ大きく分れて

いる。

未文ヶ岳

川崎 精雄

未文ヶ岳は昭和五年魚沼駒から、また翌六年荒沢岳から眺めて、この二つの山とは対照的に名も容姿も優し

感じた山である。

十一月三日零時半上野発の小出行臨急は、ワッペンを着けて待たされた時どれほど混むのかと心配したのに、がら空でぐすり眠れた。早朝の小出

たげる御池山は、全山美しい篠笹に蔽われ、東に近く大沢岳、兎岳、聖岳、上河内岳、茶臼岳、光岳、加々森山など南アルプスの雄峰に對し、西の空遠く連なる木曾駒連峰の上に、御岳が小さな姿を浮べている。

頂上の西下には山名の由来する小さな池が真青な水を湛え、この辺りに多い鹿の水飲場になっている。

石 間 信 夫

とも劣らない素朴な美しい山村であるが、眺望はさらに広く、仰山ない方をすれば、日本のナムチエバザールといった感じである。

冠さんの遠山入り、黒田夫妻の西沢廻行にてくする井戸端屋敷、牧風さん宅の縁側に腰を下せば、いながらにして南アルプスの雄峰を軒先に仰ぐことができる。

私がここを訪れたのは五月の初め、すくすくと延びた急な麦畑には、梅、

駅には福島県郡山から自動車で先着の鶴田進(會員七四八四)とTの両君がシニラフを被って寝ていた。東京組と合わせて五名、いずれも南会津山の会のメンバーである。

駒には一mも雪が降った由にまず一驚。未文は奥だからこれも深そうだと覚悟する。鶴田君の車で直ちに出發。枝折峠越えの車道を辿り、雪を装った駒の豪壮さに思わず唖ってしまふ。ダワに車を残し、黒又川への道を下る前方に、未文が姿をみせる。雪をのせた木々が尾根を飾って美しい。

オソ沢(細沢)で朝食を済ませ、はずれた梯子橋をやっとこさ架けなおし

桃、杏がいっせいに咲き競い、五月晴れの空に大きな鯉のぼりが、残雪の山をぬいて泳いでいたのは忘れられない印象である。

行程(地図)時又、赤石岳

第一日 飯田線平岡(バス一時間十分) 〓本谷口(二時間) 下栗泊

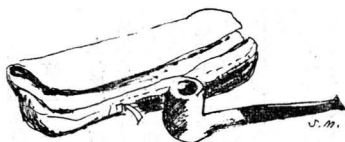
第二日 下栗泊 御池山往復(約六時間)

第三日 帰宅

(注) 一、下栗から炭焼山(一、五五四m)までは径は明瞭だが、それから上は踏跡程度である。

二、第二日、第三日を一日行程とすることも充分可能である。

(つづく)



(松本慎太郎画)

て渡る。紅葉の下を流れる溪流とその向うに輝く雪の山に、誰からもなく讃歌の音が流れる。靴を濡らして沢を渡りなおすと、そこが本流の三ッ又口である。

本流の龍渡しは、細い板橋に変わっていて楽ではあるが少しがかりした。三ッ又口の蔵探り小屋は、左手の水頭沢を渡ったところにあるが、私たちは直ちに右手の尾根につき、この尾根を辿ることとする。ここからみおろす黒又川は、全体にまとまった景観を示し、岩魚でもいけるような気配である。

しだいにせり上る荒沢岳の前面と駒から中ノ岳方面の雄姿が、われわれの足を高みへ追いつけるが、一足ごとに深くなる雪はそれを妨げる。

われわれより一足早く二人のパーティーが登っていて、その足跡がわれわれを益して呉れはした、深い雪を踏み均らすまでは到らないから、われわれもまた一歩一歩足を踏み込み引き抜

きして進む。膝までの深さである。今回の山行は、大島岳の池まで行く計画だったが、大雪のおかげで予定が全く狂った。頂上どころか頂上下の三ッ岩まで行かないうちに、時計の針はもう三時を指していた。

狭い尾根の上に窮屈をがまんして、二人用と三人用のツェルトが張られた。夕食は豪華なスキヤキ焼だ。仲間から差し入れの会津銘酒はたちまちカラになった。おかり月明で一と月早い冬山気分をたん能した。

頂上まで往復と計画変更したので、未明出発も七時出発に変更した。温い朝食をとる頃、朝の光が荒沢岳の槍の穂と、駒の頂にさしはじめた。今日も晴天(少くも昼頃までは)らしい。

カメラとテルモス程度の荷で出発。小さな瘤を越したところに、二人のパーティーは泊っていた。われわれの泊り場と似たりよったりの場所だ。昨日ラ

五郎山

川崎 精雄

ッセルをやつて貰ったから、今日はわれわれがお返した。尾根の背と思われ個所を徹底的に辿る。道の有無は分らないし考えの必要もない。

灌木帯となり、笹も現われた頂上に着いたのは八時十五分。彼の二人組（横浜の人だった）も前後して登頂したので小量のウイスキーで乾杯を分ち合う。

この乾杯で私の脳裡を走るの、やはりこの前ここに登った時の情景である。六年前昭和四十三年やはり秋だった。あの時伊倉剛三氏を先達に登った同行の面々は、藤島健男、近藤恒雄、深田久弥、村尾金二、川喜田壮太郎、望月達夫、具森健治の諸氏だった。あの時灌木の中に腰をおろして盃を傾けた深田氏、楽しげに彩管を振った川喜田氏の二人はすでにいない。私は無言で両氏の霊に祈った。

われわれは寒風の中で遠い燧岳や近い会津朝日岳を眺めた。大鳥岳の尾根は、この頂上からみれば低い。鶴田君は五十年の春に大鳥、未丈の計画をもつので、こまかい観察に余念がない。約三十分の滞在でわれわれは頂上を去った。露营地でゆっくり雑炊を平げて下山した。昨日雪を着飾った木々の中には、再び紅葉の秋に逆戻りしたのもあって、われわれを喜ばせた。三ツ又口着午後一時。足を速めて二時二十分頃にはダワの車のところに戻った。

大湯温泉の共同湯で汗を落し、ビールと井飯で腹の虫を感知させた。小出駅で福島組は車で一足先に。東京組は鈍行列車に全員足を伸ばして上野へ。（この鈍行は一週間に、私と望月達夫君が菅平の根子岳四阿山の帰途に、北軽井沢からの鈍行を高崎で乗り継いだ折の鈍行だった。）

四十九年十一月には、未丈ヶ岳行の後で、甲武信岳へ行った。五万分（金峰山）地図で、甲武信岳の西北に当り、千曲川上流に近い二、一三二mと記るされた山である。

同行は会員山田哲郎君と近日会員になる予定の中西重君の兩名。未丈ヶ岳の時と異り夜行列車は満員で、別々の客車にいた三人が小淵沢でやっと一緒に、小海線に乗り換えた。

信濃川上駅から梓山行バスは、十文字峠越えや甲武信岳方面の人で、やはり満員だった。舗装された道路が私には目新しい。梓山の人家に荷の大部分を進め、梓川に沿った国師岳へ向う車道を進む。広過ぎる道だが、高原状地帯だからしばらく我慢する。

右手に一、九六九mと二、〇六五mの二つの三角点をもつ鷹ノ巣山の尾根が鋸歯のようだ。枯れた芒や葉の落ちた白樺を前景に眺めるとなかなか立派な山で、そこらへも食指が動く。惜しいことに山腹から下は伐採され丸裸である。ちょうど梓山から四kmほどの地点で、伐採小屋の聚落の跡があり、常楽院乎と呼ばれているらしい。

車道は分岐し、われわれは左手からくる支流の奥目指して入る。そこも高原状になっていて、初めて五郎山の岩峰が仰がれる。それは三つばかりある岩峰のもっとも手前のらしく、岩峰といってもこの辺の山によくみる露岩の部分と、樹木の生えた部分をもつ奴である。三角点のある岩峰はまだみえない。

頂上から南へ走る尾根は、しだいに高度を上げて行き奥秩父主稜につながる。その走りはじめる地点へ登って頂上の方へ左折するか、直接にもっとも手前の岩峰に登ってから右折するかが、後者にきめた。

沢を離れて、頂上までの高度差は約六〇〇mだ。雑木に白樺の混じった気持よい林の中を直登する。岩塊が多くてよい足場を提供してくれる。落葉が深い場所もある。急な登りで木の枝や岩につかまる。意地悪く夜汽車の疲れがでてはじめて辛い。鷹ノ巣山の向うに明日の予定の小川山が姿を現し、その左に金峰山もみえる。天気がよいから汗がでる。

岩峰はマキヨセ頭と呼ぶらしい。そこへ匍い上ると千曲川の流域が見下ろされ、天狗山や男山のシャープな姿、それに相木山群の雄倉山（御座山）の黒木をまとった姿が横たわっている。さらに千曲川の下流近く、密雲の上に、新雪の八ヶ岳連峰が威風をみせている。

岩峰の裏側はコメツガなどが密生して、石を蔽う苔の色も濃い。急な落ち込みの斜面を木や石を頼みに進む。さらに二つばかりの岩峰を渡ったり巻いたり、最後の岩峰の南側の裾をへずってから尾根に登った。灌木をつかんで登ったその最後の岩峰の上に三角点があった。

頂上着零時半は予定より著しく遅かった。高度だけで予想した所要時間だし、夜汽車の疲れで仕方ない、ということに理屈をつけた。紅茶やヨーヒールをたっぴり楽しんだ。落葉松の向うに甲武信岳三宝山の澄んだ尾根がみえ、ここから甲武信までは尾根を辿って行けそうな感じである。

その尾根をわずかに南へ行き、登りはじめの場所へ下る予定だったが、時間節約のため、頂上岩峰の根元からでて

上高地山岳研究所 第二次一口募金のお願

上高地山岳研究所は、皆さまのご協力により昨年完成致しました。しかし、この『山』誌上でもたびたび掲載いたしましたとおり、何分にも追加工事ならびに諸物価高騰により当初予算を大幅に上まわり、あと四〇〇万円の支出を要求されています。

そこで、このたび、第二次一口募金（三、〇〇〇円）を開始いたしました。どうか全会員あわせてこの再募金にご協力をお願い致します。

いる五郎沢を下ることにした。最初はカヤトと灌木林の中を飛ぶように下った。だが沢に入ると凍っているから滑って危い。滝のところは樹林の中へ匍い上って木にぶら下がって、滝の下にでることを繰り返した。意外に手強い山だった。常楽院平へ戻ったのは四時近くだった。手ごわかった山だったから、三人は五郎ヤマと呼ぶのをやめて五郎サンと呼ぶことにしよう、と笑いかけた。

五郎サンで時間を費したので、今日のうちに小川山の麓まで行って天幕を張り、翌日小川山へ登ることは辛くなかった。急いで梓山へ戻り預けた荷を取り、落葉松の森の祠の前に、ツエルトを張りかけたが、森の所有者がそんな寒いところより、うちの物置に泊まれ、と誘ってくれた。渡りに舟である。数年前まで牛舎だったという物置は今では清潔で、電灯も水道も完備、磨つき上下トイレ付、傍らには白菜が貯蔵してある。三人は豊富な馳走に、一日の終りを楽しんだ。翌日は地主にお茶を呼ばれた上白菜をみやげに頂き、例により鈍行列車で帰った。

草木抒情

伊藤秀五郎

がんこうらん
鳥は天を翔け
けものは地に潜み
わたしは霧で化粧する
訪れるものはない
山頂の岩陰で

みやまうすゆきそう
古里は
氷河に削られた山頂のカール
名付親は風だ
カールを取り囲む垂直の絶壁
そこではときに質量は消え時間が停止する
その時だった
彼女が寂寥の意味を覚ったのは
再会を怖れてはならぬ
敵であっても
運命であっても
はまたまた昔日の恋人人であっても

岳かんば

酷暑が訪れる前に
鋭く青い葉先を研げ
研いで光芒の行方を占へ
たとえ運命に従順であるにしても
あるいは運命に反逆するとしても

竹

オンコ

冬籠りをする前に
まず自閉症から解放されることだ
壮烈な風雪と戦うためにも
越年の静謐に耐えるためにも

一等三角点について

水 野 公 男

最近海外登山を目指す人々の多い中
にあって日本の山をこよなく愛し、た
だひたすら登りつづける者の一人であ
る。

最初地元の静岡県内に一等三角点
が何カ所あるのだろうかと思ひ調べ始め
たが、それを全部登ってしまふと生れ
ながらの凝性を顔でだして、日本全国
にいったい何カ所の一等三角点がある
ような場所にあるのだろうかと思ひを
抱くようになった。そして資料集めと
現地踏査に夢中になった。

一等三角点のある山は展望のよいと
ころと昔からいわれたが、実際に
現地を踏んでみると、今日ではもはや
木立にさえぎられてすっかり眺望を失
っている場所も多いことがわかった。
われわれが常日頃親しんできた平板
測量による五万分一地形図が日本全土
をおおむね完成されたのは大正十
五年のことであった。

この日本全土を対象とした五万分一
地形図の本格的な地図作りがはじめら
れたのは明治のはじめで、明治二十
一年に陸軍参謀本部に陸地測量部が創設
され、日本全国の基準点測量や基本図
測量を実施し、第二次大戦後には内務
省地理調査所がこの事業を引きつぎ、
昭和二十三年に建設省の地理調査所と
なり、七月に建設省ができてその所
属機関となり、さらに昭和三十五年七
月に国土地理院と改称されて現在に到
っている。

昔なつかしい黒一色の五万分一地形
図は今市場に姿を消しつつあり、現在
では平板測量にかわって、写真測量に
よる二万五千分一地形図が基本図とな

り、色刷りの五万分一地形図はこの新
しく描き直された二万五千分一基本図
四枚を編集し直した編集図としてやが
て日本全国が描き改められることにな
っている。

しかし、これらの新しい地図の基準
となる骨格をなしている三角点は、現
在のところまだ、明治にはじめられた
三角測量の成果が用いられているので
ある。

建設省国土地理院発行のシオリ「国
土地理院のしごと」に「基準点の標石を
大切にしましょう」を読んでつぎのよ
うなことを知ることができた。

測量法で定められている永久標識の
なかでもっとも代表的なのが三角点
と水準点で、昔から花崗岩を用いてい
たが、最近では真鍮製の金属標も使用
されている。平地にはその他に多角点も
設けられている。

これらの標識は、基本図作成や各公
共事業などの測量の基準となるきわめ
て重要なもので、通常基準点と呼ばれ
ている。

また、これらの測量の基準になるも
のとしてつぎのようなものがある。

日本経緯度原点

経度 東経一九度四四分四〇秒五〇
二〇 緯度 北緯三十五度三九分一七秒
五一四八 原方位角 一五六度二五分
二八秒四四二

(旧五万分一に記載されている十秒四
は、東京都港区麻布飯倉三ノ一八にあ
り、日本全国の三角点の経緯度はこれ
を基準として決定される。明治のはじ
め東京天文台があったところで、ここ
で精密な天文経緯度測定が繰り返して

われた。この黒い御影石は天文観測に
用いられた子午環の架台の跡であり、
中央の丸い位置が原点を示している。)

日本水準原点

標高 二四・四一四〇m

(国内の測量の高さの基準となってい
る。ただし、離島における高さの基準
は別に設けられている。原点の高さ
は、明治六年六月から十二年十二月ま
での東京湾雪岸島の驗潮場における平
均海面を0mとして明治二十四年に東
京三宅坂にある現在の尾崎記念公園内
につくられた。石造りの建物内部の水
晶板のゼロ目盛が東京湾の平均海面か
らの高さを示す。なお、大正十二年の
関東大地震までは、二四・五〇〇mで
あったが、復旧測量の結果現在の値に
改正された。)

〇原方位角

一五六度二五分二八秒四四二
(日本経緯度原点を通る子午線—経線
—の真北を0度とし時計と同じ右廻り
に千葉県の鹿野山の一等三角点の角度
をはかった値で、国内の三角点の角測
量のもとなる角度である。)

〇基線

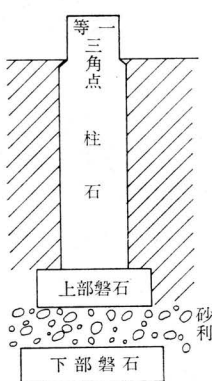
(三角測量の基準として必要な最初の

三角形の一边の長さを測定するための
測量を基線測量という。

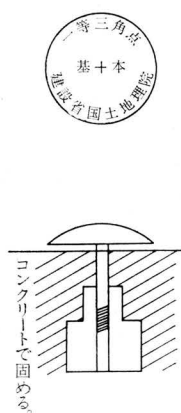
伸縮の非常に小さい金属製のものをさ
しを使って基線の両端の一等三角点の
標石の間をむすぶ直線の長さを直接
に測定し、その間を短時間に何度か精
密に測定してさらに種々の補正をして
全体の長さが百万分の一以下の誤差に
とどめられるように測定される。この
ようにして求めた、五Kmぐらいの距離
をもつ基線をもとにして、その両端か
らさらに三角測量を繰り返して次第に
その基線を増大し、大きな一等三角点
間の一边の距離を求め、
これを三角測量の一边の長
さのもととする。全国の三
角測量を行うに当たっては、
約十五カ所の基線を設けて
各三角点間の距離の点検に
用いた。)

さて、一等三角点である
が、見通しのよい山頂など
を利用し、大体四十五Kmぐ
らいの間隔で選定される。
一等三角点間には一边がお
よそ二十Km間隔で一等補点
が設置されている。

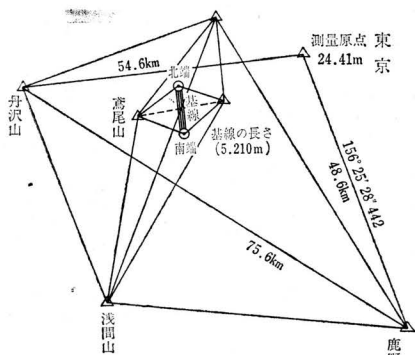
一等三角点断面図



金属標の表面



基線測量から一等三角測量 (相模野基線)



基準点標石の大きさ

	一等三角点 点補点	二・三角点	四三角点 等点
柱石頭面の一边	18cm	15cm	12cm
頭部の高さ	21cm	18cm	15cm
柱石の長さ	82cm	79cm	63cm
上部磐石の一边	41cm	36cm	30cm
磐石の厚さ	12cm	11cm	9cm
下部磐石の一边	45cm	なし	なし
盤石の厚さ	9cm	なし	なし

標石は瀬戸内海の小豆島で採取された
「ももいろみかげ石」が使用されている。

一等三角点の名称は、旧来の地名を
採用したものが多く、時代の推移によ
り現在の地名や山名とは異なっている場
合も決して少なくはない。
一等三角点の点石は現在全国に約三
十一点あり、一等点から四等点までの
すべての三角点の数はおよそ六万点に
達する。
また、一等三角点は、通常「ももい
ろみかげ石」を使用した四角形の標石
であるが、近年では丸い金属標や、四
角な金属標も使用されている。
標石頭部には、十字が切っており、

三角点と水準点の大きな違いは、水準点が経緯度の測定は行われなにかわりに、直接水準測量により精密な高さが求められているのに対し、三角点では地球上の位置(経度・緯度・高さ)が求められている点にある。ただし、三角点の場合には特別なものを除いて高さの測定は、近くの水準点などから間接的に求めるので、三角点の高さは、水準点ほど高い精度をもっているわけではない。

また、大菩薩嶺の頂上に一等三角点
が設けられていると、ガイドブックや
頂上掲示板(三角点わきに立てられて
いる)に記載されているが、私が標石
をみたかぎりでは一等三角点と思わ
れず、この誤りがどこからでたのか不
明である。

院呼称名	国土地理
山地	名名
標高	標高
本点	三角一等
補点	三角一等

大博多山	赤松山	新保岳	栗山	土埋山	三倉山	栄蔵室山	七ヶ岳	富士見山	妙見山	蓬田山	屹馬屋山	博士山	大戸山	高旗山	大滝根山	日隠山	鳥屋山	猫摩岳	二本松	羽山	鉄山	吾妻山	女神山	半田山	飯森山	栗子山	飯豊山	以東岳	中沢山	大洞山	白鷹山	三休山	蔵増村	麻耶山	月山	葉山	手倉山	黒森山	四方山	岩駒ヶ岳	岩駒ヶ岳	浅草岳	武那ヶ平	経塚山	鶴ヶ巣	松ヶ崎	松平山	日本平山	護摩堂山	弥彦山	大田山	鋸山	千本	越駒ヶ岳	川井	米山	有倉山	割引岳	谷川富士	黒井	菱ヶ岳	長ヶ原	苗場山	鉦ヶ岳	黒姫山	白馬岳	妙高山	斑尾山	頃藤	高鈴山	白山	八溝山	稲荷山	高原山	早乙女	八幡山	羽賀場山	男体山	黒岩	袈裟丸山	武尊山	唐沢山	晃石山	磯山	高田山	磯ノ浜	平須	吾国山	筑波山	赤城山	城峰山	上城山	子持山	樺名富士	長田山	高倉山	上山川	小堤	癸戸	三ヶ尻	大竹	下玉里	四鹿	弁天山	弁天山	神倉	飯倉	高岡	牛久	稻村	杓掛	柳沢	高野	石戸	堂平山	物見山	大和田	根岸	徳丸	本郷	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳	高根	三鷹村	馬橋	法典村	根角村	竜賀	桜井	高神村	飯岡	虫生	片貝	高松	四ッ街道	安養寺	安蔵寺	一ノ宮	野々塚	大谷	蔵浪	鹿野山	峰岡	大川	鋸山	房大島	東京	上沼部	蓮光寺	下溝村	座間村	長沢町	鷲尾山	二子山	浅間山	丹沢山	雲取山	国師岳I	国師岳II	御正体山	冠ヶ岳
------	-----	-----	----	-----	-----	------	-----	------	-----	-----	------	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	-----	-----	------	------	-----	------	-----	-----	-----	-----	------	------	-----	-----	----	----	------	----	----	-----	-----	------	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	----	------	-----	-----	-----	----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	----	----	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	----	----	----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-------	------	-----

武石峰	鉢盛山	乗鞍岳	吾善山	守屋山	御嶽山	信駒ヶ岳	戸倉山	三階岳	摺古木山	鬼面山	屏風岳	恵那山	熊伏山	出来山	三本宮山	神石山	富巻山	神ヶ谷村	都田村	新野田	白倉山	黒法師岳	赤石岳	大無間山	高天神山	八高山	坂部村	竜爪山	岩科村	天城山	達磨山	愛鷹山	羽鉚村	毛無山	大峠	甲駒ヶ岳	赤岳	塩崎村	黒岳	小金沢山					
		御善山	御善山			木曾駒		三界岳							本宮山		富暮山	浜松市	浜松市	磐田市							高根山	文珠岳	万三郎岳				三角点		増穂町	甲斐駒	八ヶ岳	竜王町							
一、七五三	二、四八三	三、〇六三	一、八四三	一、八四三	三、〇六三	二、九六三	一、八四三	一、八〇三	二、六六三	一、八六三	二、九六三	二、九六三	一、七五三	一、七五三	三、九六三	三、九六三	二、九六三	二、九六三	二、九六三	二、九六三	一、〇七三	二、〇六三	三、一〇三	二、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	一、五四三	一、五四三	二、四八三	一、八六三	二、四八三	二、四八三	二、四八三	二、四八三	二、四八三	二、四八三	二、四八三	二、四八三	二、四八三	二、四八三	二、四八三			
			▲												▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲				▲												
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△

私たちは三十日の夕方、先発の二人と合流し、全員（十五人）カトマンズに集りました。

翌日よりキャラバン出発の準備をすすめておりましたが、二月八日、いよいよエベレストへ山ろくへ向けて歩き始めることになりました。荷物の空輪は今日から始まり二人が最初の荷物と共にルフラへとびました。カトマンズの街は二月末の戴冠式を控えて活気にみちています。道路も大分整備されました。まだ工事中のところもあります

海外からの便り

根岸	穂高岳	常念岳	大雪山	立山	濁谷山	岨ノ景	権現山	聖馬山	聖馬山	井上岳	雁田山	東山	西谷山	岩菅山	龍ノ塔山	蓼科山	四方原	八風山	赤久縄	合計	三笠	箇所
前穂高岳	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三	二、〇〇三
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲

佐藤テル様

ブエノスアイレスより

（一月二十六日）

お元気で新年を迎えられたことと存じます。私共は、ベネズエラからコロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリを経て予定より早くブエノスアイレスに到着しました。アコンカグアはテントがなくて登山許可がとれず断念しました。食物が安くておいしく、楽しい南米の旅です。（田村）

アルゼンチンに入って、やっと文明国に逆もどりに感じられました。ペットルム二つ、ロビンと台所づきの素朴なニューベシオンに泊まり、旅の疲れを休めています。ショーウィンドウの豪華な品々が目についてなりませんが、財布の軽さに目をつぶって通り過ぎる始末です。（森）

ご無沙汰お許しください。オオランギの皆さまお変わりございませんか。あつという間に月日が流れ、旅行なかばになってしまいました。仕事の鬼の森ちゃん。大分鬼ババちゃんに似てきたようです。毎日が楽しく、おいしいものを食べては、N.Z.でのことを思い出しています。（小倉）

ビーノ（ワイン）飲んで、肉食べりや、

一日一、〇〇〇キロ、朝メシ前サ、たらふく食べて、今日も元気、こは南米、サルノと乾杯、（我々の歌の一節であります。）（大賀）



（新版）アルプス記

松方 三郎著

昭和十二年六月、著者三十八歳のとき刊行されたこの名著についていまさら喋々する要はあるまい。著者みずから「ぼくにとっては初めての本だし、懐しいアルプスでの山旅の思い出を主にしたものであるから、かげがえのない本だ。それと、一個の書物としてあの本は、出来上りがいかにも美本の一つで、ぼくは特別の愛着をもっている」と今度でた新版のあとがき（昭和四十六年十月十日日記）で書いているように、登山ばかりでなく美術、民芸、書物などにも限らない愛を抱いていた著者が、もともと気に入っていた書物だった。このたび著者自身の手で新カナになおした新版が、前と同じ童星閣から見事な装幀造本で上梓されたことは、本書がすでに稀覯本となり古書として法外な値段になっている現在、まことに結構なことと思う。

ただ四六判の元版と異なる点は、新版は菊版であるため前著が三二六ページと、元版では本文のところに挿入された八枚のコロタイプ版写真が新版では写真版となって口絵にまとめられていることである。写真版は旧いコロタイプ版の味わいが出ない点で、惜しいが、やむを得ないことであらう。その他細かい点では紙装がクロス装となり、背角トジが丸トジとなったことと、天金がなくなったことである。なお新版には前記した著者のあとがき一ページが巻末に添えてある。

松方さんの随筆はどの一篇をとっても、眼前に松方さんを髣髴たらしめる名文であり、松方さんならたは書き得なかつたものばかりであつた。いま新版を手にしてしみじみ思うことは、生前あんなにお丈夫だったのだから、もっと永生きして、もっとたくさん書いておいて頂きたかつたということである。

昭和四十九年九月十五日、童星閣刊定価四、六〇〇円、他に特装版あり（望月達夫）

あとがき 一昨春秋、一時『山』の発行がピンチになった。そこでピンチヒッターとして短期間のつもりで私が本誌の編集を引受けた。その後、適当な後任者が得られないうちに、ついに本号までに十八号と索引を編集したことになる。しかし、このたび大森久雄氏と片山全平氏のお二人が五月号より本誌の編集を引受けて下さることになりましたので、大安心です。私同様、会員各位のご協力をお願いしたいと思います。

最後に、私の在任中、執筆をしてくださった各位に心から感謝致します。（小倉 厚）

昭和五十年四月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六一
利根川商事株式会社ビル

発行所 法人 日本山岳会
社団法人 日本山岳会
編集代表 山崎安治
（813）二二八六（代表）
振替口座東京八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

かんあおい

山下一夫著 <A 5判>定価2,600円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

<B 5判430頁・カラー64頁>定価4,800円

シブトンの自叙伝

大賀二郎・

未踏の山河

倉知 敬訳

<A 5判440頁>定価1,900円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 <菊判584頁>定価2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安著 <A 5判482頁>定価1,500円

山の古典と共に

大島堅造著 <四六判280頁>定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

<A 5変型判340頁>定価1,200円

我がスキーシュプール

麻生武治著 <B 6判388頁>定価3,400円

昭和50年版

山日記

日本山岳会編

<A 6ポケット判>定価950円

山岳

日本山岳会編

<A 5判>

総索引 1,000円

68年	3,000円
67年	2,500円
66年	2,300円
65年	2,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編

<A 6判126頁>1集240円・2集280円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 <B 6判202頁>定価480円

日高山脈 北大山の会編

<菊判362頁>定価2,200円

吉沢一郎古稀記念論集

カラコラム

<B 5判200頁>定価3,400円

小さな頂

一原有徳著

<A 5判360頁>定価2,900円

原野から見た山

坂本直行画文集

<B 5箱入布特製本>定価4,200円

雪原の足あと

坂本直行著 <B 5判206頁>定価2,800円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

<A変型208頁>定価3,600円

いろいろばた 南会津山の会

<B24どり判320頁>定価1,900円

すこし昔の話

初見一雄著 <四六判400頁>定価1,200円

ブータン感傷旅行

小方全弘著 <菊判280頁>定価980円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 <A 5判350頁>定価900円

登山・スキー用具専門店

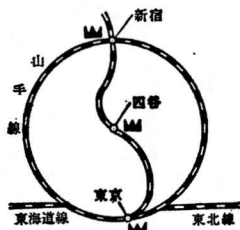
●買いやすい
山の店

山の店

●北へ来たら
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●フレッシュな
山の店四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6566

日本信販加盟店



山友社 たかはし

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要るものがある。
なにしろ人間ですから
そして登山ですから
どうしても必要なもの
をこしらえてやる
まじはもっています

おたるびンテイ
でん 281-8456
中央区・八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



会 務 報 告

二月理事会

(二月七日午後六時ルーム)

▽出席者 今西会長、織内副会長、板倉、伊倉、近藤、浜野、神崎、松丸、山本、丹部、田村、浜口、大倉各理事、今井監事、山崎評議員、高遠、三枝各委員、委任 中屋副会長、宮下理事、望月評議員

▽議案

・山研募金について (伊倉)
現在会員数は約三、〇〇〇人であるが、第一次募金に応募した会員は五七〇人に過ぎないので、残る会員全員に一口(三、〇〇〇円)募金をお願いし、とくに会に關係の深い人からは一口一万円の募金をお願いしたい『山』に募金お願いの記事をだす。また、第一次募金をされた方でも追加していただければ幸いです。

・事務局岩佐氏退職について (板倉)
二月末での退職願いがだされているので至急後任者を探さなければならぬ。現在各所に申込んである。

・七十周年記念事業について (織内)
記念晩餐会と年次晩餐会を一緒にやることに決定、期日十二月六日(土)場所京王プラザホテル(予定)

・三月理事会・総会日程について (板倉)
理事会(予算審議)三月十四日(金)三月二十五日(火)午後六時、ルーム、総会四月二十三日(水)午後六時会場 第三利根川ビル会議室、支部長会議四月二十三日(水)午後三時ルーム。

了承

・第Ⅱ次RCCカラム登山隊(一九七六)推薦状交付について(板倉) 了承

・ナンダ・デヴィ遠征計画について (説明 鹿野) 了承

計画の詳細は『山』に発表する

▽報告事項 (神崎)
・集会
二月二十日青山学院大ヒマルチュリ報告会、三月十五日 新入会員オリエンテーション(会長出席) (山本)

・図書
二月十六日にルームの洋書関係図書を整理

・山岳編集
六九年準備中、七十年は特別に委員会メンバーを決めて着手予定。

・指導
第十五回登山技術講習会をネパールヒマラヤのトレッキングとして四月二十三日〜五月四日に実施予定、案内は『山』に折込みでだす。

・医療
一月二十五日に四十九年度の夏山反省会を開催した。

雪崩シンポジウム報告

日時 昭和49年11月13日(水)、14日(木)、15日(金) 6・30PM

場所 岸記念体育館 四〇一室

形式 講演会、会員全員自由参加

講師 日本雪水学会 中島 洋 日本山岳会 谷口現吉、金坂一郎、山崎安治、大塚博美、松永

敏郎 担当 遭難対策委員会(金坂・宮下) 指導委員会(田村・大倉) 学生部(高橋・蒲池)

プログラム
第一日目11月13日(水) 岸記念体育館
6・30〜6・40PM
開会式 宮下秀樹

6・40〜9・00PM
雪崩の理論 中島洋(分類 発生原因 雪の性質 雪崩の予報他)

第二日目11月14日(木) 日本山岳会
6・30〜7・30PM
雪崩の予防 金坂一郎

7・40〜8・40PM
雪崩対策 リーダー論 教育論

(座談会形式)
8・40〜9・00PM
総括 金坂一郎

第三日目11月15日(金) 日本山岳会
6・30〜7・30PM
雪崩遭難の捜索 松永敏郎

7・40〜8・30PM
雪崩遭難の実態 山崎安治

富士山の雪崩 大塚博美
白馬杓子沢雪崩

8・30〜9・00PM
総括 谷口現吉
開会式 金坂一郎

恒例となった、雪崩シンポジウムも今回も前記のとおり終了いたしました。

なお、日本雪水学会の中島洋先生に絶大な指導をいただき、貴重な雪崩のフィルムまで用意していただきました。

(文責・神崎忠男)

昭和四十九年度忘年会

例年のとおり忘年会が十二月二十日

夕山岳会ルームで催された。主催は集会委員会と婦人懇談会であったが、その婦人の方は遠征している人が多いのか少なめだった。

でも多数集って頂きたい一夜をすごすことができた。とくに小原夫人が作って下さった汁はとて美味で、何杯もおかわりをしている人もいた。

何時もは歌わない人が歌ったのも面白かった。

今年から会費を一躍千円に値上げしてしまつたが、あまり趣向も凝らさなくて主催の一人として申し訳なく思っている。来年はもっと面白い催しにしたい。

当夜の出席者 板倉勝正、浜野正男、山崎安治、中保、井口邦利、菅野弘章、日高信六郎、小原晴子、加藤泰安、西奥亮平、堀内章雄、小林重一、田中清子、浜田一馬、白井厚子、勝田房治、山口節子、東原進、椿シゲ子、越田和男、泉久恵、斎藤かつら、伊藤博夫、近藤信行、進藤波男、ハロルド・ソロン、黒石恒、小川武丸、鈴木郭之、宅間清子、梅野淑子 合計三十一名 (梅野)

ルーム日誌 (50年2月)

3日(月) 集会委員会

4日(火) 婦人懇談会ガールワール研究会

5日(水) 学生会

6日(木) 明治大学山岳部総会

7日(金) ナンダ・デヴィ委員会

13日(木) ナンダ・デヴィ委員会

14日(金) 海外連絡委員会

18日(火) 七十周年記念事業委員会

19日(水) 婦人懇談会

20日(木) 第三一八回小集会「青山学院大学ヒマルチュリ遠征報告会」

25日(火) 青年懇談会

27日(木) ナンダ・デヴィ委員会

二月中来室者 四四〇名

会員異動

終身会員(50年2月) 一五〇〇 大野 俊夫 改名 二六九七 岩間 升(旧、岩間 昇) 退会(50年1月) 六二七四 増山 直義

ご挨拶

長い間ご厄介になりましたが、私本日をもまして退めさせて頂くことになりました。うかうかと長居をしまして、ご迷惑をおかけしたことをまずお詫び申し上げます。立てた筈がぐたびれて横になって休んでしまったことでしょう。気がついたら丁度満六六年になりました。

た。短かい期間ではないのに過ぎてしまえば早かったと実感です。

独り合点の居心地の良さ(仕事は別)に甘えて過ぎてしまいました。雰囲気の良いには独特のものがあるように感じます。

まことに長い間有難うございました。皆さま方のご健康とJACの限りなきご発展を祈念してお礼のご挨拶いたします。

昭和五十年二月二十八日

事務局 岩佐義宗

木暮祭のお知らせ

左記により木暮祭を行います。参加者は四月末日までにルームあてお申込み下さい。

記

日時 五月十日、十一日

場所 金山有井館、十時午後三時まで各自お集り下さい。

参加費 約四千元(除交通費)

主催 日本山岳会有志 霧の旅会

東海支部通常総会のお知らせ

時 一九七五年五月十一日(日曜) 十五時～十六時

所 愛知県青年会館第八会議室(名古屋市中区栄一ノ十八) 電話〇五二二二一六〇〇

議題 一九七四年度事業報告

一九七五年度事業案

決算および予算案

その他

訂正 本誌三五七号 八頁 最下段七行目「狼が一匹」とあるは「狼が一匹」の誤りにつき訂正させていただきます。